

INTERVIEW

帝京大学ちば総合医療センター
地域医療センター 教授
井上和男 先生



私の考える「地域医療学」とは.

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

大学でプライマリ・ケアを教える

山田隆司(聞き手) 今日帝京大学ちば総合医療センターに井上和男先生をお訪ねしました。まずは先生のご経歴を伺い、それからこの地域医療センターに教授として赴任されてからのこれまで、そして研究者として教育者としてご自身が今後やっていきたいことなどをお話しいただきたいと思います。

井上和男 私は自治医科大学、高知県出身の5期で1982年卒業です。高知県立中央病院で2年間の初期研修を受けそれから診療所へ赴任しましたが、義務年限を終えても診療所で勤務したいと思っていました。そこで、8年目の後期研修の時にニュージーランドとオーストラリアへ行きました。

山田 8年目にどうして海外へ行けたのですか。

井上 8年目か9年目に後期研修があって高知県も初期研修病院へ1年間行くのが一般的だったのですが、その頃日本にはプライマリ・ケアを専門とする家庭医を学べるところがなかったのですね。だから海外へ行かせてくださいとお願いしました。高知県は県職員の人事ではなく市町村の職員という形だったので、1年間行かせてもらうことができました。

山田 費用はどうしたのですか。

井上 帰ってきたら義務年限が終わるまできちんとへき地で仕事をするという条件で、費用は自治医科大学出身医師を擁する市町村協議会が通常の給料を出してくれてそれで賄いました。帰っ

てきてからは、本川村国保診療所へ赴任しました。

山田 そこで義務年限が終了したわけですね。その後はどうされたのですか。

井上 義務年限終了後も4年ほど、同じ診療所で勤めました。そして母校の故五十嵐正紘先生の地域医療学教室に2年間行きました。あの頃は五十嵐教授の薫陶を直接受けた若手の医師たちが多く集っていて、一番盛り上がっていた頃でしたね。

山田 そうでしたね。先生はどうして自治医大地域医療学に行こうと考えたのですか。

井上 自分のやりたい研究があり、教員として戻って視野を広げたいと考えていたところ、講師(後に助教授)の奥野正孝先生に声をかけていただきました。

自治医大地域医療学に2年間いた後はまた地域医療に戻りたいと考えて、四万十川の中流の十和村(今は合併されて四万十町となった)で3年勤務して、その後高知市内の民間病院から内科の医師がいないので来てほしいと言われて、そこに2年行きました。その間もずっと一人で研究をしていたのですが、東京大学の公衆衛生学の小林廉毅教授が現場のデータを取りたいと、高知へ来られました。そのときにぜひ東大の公衆衛生学に来てほしいとの話をいただき、2003年に助教授として赴任しました。

山田 東大の公衆衛生学にはどのくらいいたのですか。

井上 2003年から2009年までの6年間です。

山田 それからこちらへいらしたわけですね。

井上 そうです。もうかれこれ13年になりますね。

帝京大学に限らず私学の医学生は開業医の子弟が多いのですが、大学の教員の多くは専門医なので、私にはプライマリ・ケアの教育が求め

られたのだと思います。加えて今、医学教育モデル・コア・カリキュラムでも地域医療教育の重要性が謳われています。実際帝京大学でも定員増を伴った地域枠ができました。現在、地域医学の講義も15コマありますし、通年で地域医療実習も行っています。

山田 医学生の早い時期にプライマリ・ケア、総合診療、地域医療の基盤となるマインドを学ぶことは重要ですが、当時大学でそれを理解しているところは少なかったと思うので、先生が着任されたのは斬新な取り組みだったのではないのでしょうか。

井上 私が思うには、例えば開業医の子弟なら親御さんの姿から学べると思われるかもしれませんが、やはり違うのですね。大学の6年間の学びの中で、プライマリ・ケアや地域医療がどういう位置づけであるかをしっかり教えないと、そこに価値を見出せなくなってしまいます。専門を持って地域で開業してやっていたらそれが「地域医療」だという勘違いが起きてしまいます。

山田 本当にそう思います。今、総合診療や地域医療といったことが後期研修の中で議論されていますが、本来そういったことは20代後半の専攻医が初めて学ぶことではないと思うのですね。病める人たちへの基本的な姿勢や地域の医師としての使命など、全ての医学生が学ぶべきことだと思います。先生は早くからそういったことに取り組みされたわけですね。

井上 内科実習の一環としてこの市原周辺の開業医の診療所での実習を始めたところ、診療所の指導医の先生から「遅刻してくる」「挨拶をしない」と言った言葉が返ってくることもありましたが、そういったことも学生に教えなくてはいけないと考えるようになりました。そこで1年生に対